

口腔紡錘細胞扁平上皮癌由来細胞株の樹立

川口翔、川原健太、吉田遼司、廣末晃之、中山秀樹

熊本大学大学院生命科学研究部歯科口腔外科学講座

【緒言】紡錘細胞扁平上皮癌は、紡錘形細胞を主とする肉腫様の組織と通常型の扁平上皮癌を伴って増殖する高悪性度癌であり、扁平上皮癌の亜型の1つとして分類されている。咽頭、喉頭に好発し、歯肉での発生は比較的稀である。通常型の扁平上皮癌と発症危険因子の喫煙・飲酒は同じであるが、放射線治療後に生じることも多く、肉眼的には偽膜に覆われた潰瘍を伴うポリープ状病変としてみられることが多い。今回われわれは上顎歯肉に生じた紡錘細胞扁平上皮癌に対して、初回治療後の後発頸部リンパ節転移をきたしたリンパ節から初代培養を行い、細胞株を樹立したので報告する。【材料(対象)と方法】患者は84歳の女性。右側上顎歯肉紡錘細胞扁平上皮癌の診断のもと、201X年8月に全身麻酔下で右側上顎部分切除術を施行した。術後約8か月後に後発頸部リンパ節転移を認めたため、根治的頸部郭清術変法を施行した。手術同日に転移リンパ節から組織の一部を採取し、初代培養を開始した。約1年間50継代以上培養を継続し、樹立した細胞株において増殖能および浸潤能を測定した。さらに上皮間葉移行(epithelial mesenchymal transition: EMT)との関連も検討した。【結果】初代培養細胞は紡錘形状を呈して増殖し、既存の口腔扁平上皮癌細胞株と比較して強い浸潤傾向を示した。またE-cadherinの発現低下とvimentinの発現上昇が認められ、紡錘細胞扁平上皮癌とEMTとの関与が示唆された。【結論】口腔紡錘細胞扁平上皮癌由来の細胞株樹立に成功した。本細胞株を用いることで、口腔癌の浸潤能や転移能の解明の一助となる可能性が示唆された。